平成24年度　学校評価書（自己評価・学校関係者評価）

1　学校の教育目標	1　自己の個性を伸ばし、意欲的に学び続ける人間の育成	
	2　自主自立の精神を持ち、社会の発展に寄与する人間の育成	
	3　心身ともに健康で、心豊かなたくましい人間の育成	
2　今年度の重点目標	1　キャリア教育の充実	3　危機管理体制の整備
	2　特別支援教育の推進	4　生涯学習講座の運営
3　昨年度の成果と課題	1　定通共通目標の進路決定率は昨年度61.8%と健闘したが、目標の65%にとどかなかった。今年度も継続して、キャリア教育の充実を図っていく。	
	2　生徒の登校日（学校行事を含む）の出席率、保護者のPTA総会や研修会への出席率など、目標を達成できなかった項目に対しては検証を行い、指導や働きかけに努める。	

評価基準　A：達成できた　B：ほぼ達成できた　C：あまり達成できなかった　D：達成できなかった

領域	重点目標	評価項目	自己評価	今年度の成果と課題	次年度への改善点	学校関係者 評 価	学校関係者の意見・要望
学校経営計画	開かれた学校づくりの推進 信頼される学校づくりの推進	学校評価の実施と活用 学校関係者評価の導入と活用 教育公務員としての倫理観の涵養	B	学校評価のシステムの締約に加え、グループウェアの試行も定通で実践できた。 校内倫理委員会も臨時のものも含め、４回実施した。	学校評価システムを次年度の学校経営に活かしていく。学校ＨＰをネットコモンズを活用したものに本格移行し、タイムリーな情報発信を行う。	B	学校の存在を一般の人々に広く知ってもらうことが必要であり、これまで以上に、外部に対する情報発信を推進してほしい。
学習指導	確かな学力の育成 確かな学修の保障	授業評価の実施と活用 シラバスの作成と活用 面談・添削を通した学習意欲の喚起	B	生徒の実態に即して適切な学習指導を行うことができた。単位修得率を上げるための工夫が必要である。	興味・関心を引き出す学習指導の研究を推進し学習意欲を喚起する。授業・面接指導の欠課をなくす全校的な取組。	B	生徒それぞれの学習到達度に応じた授業展開のさらなる工夫が求められる。新学習指導の本格実施を迎え、興味関心を引き出し、わかる授業をめざしたい。
生徒指導	心に響く生徒指導の実践 特別活動の充実	ＨＲ活動や行事を通した協調性の涵養 生徒会活動や部活動を通した自主性・責任感の育成	B	問題行動は減っていないが、雰囲気は落ち着きつつあり、学校行事や部活動への参加などは良好である。	新入生が落ち着くまでの指導に課題がある。また、巡回指導などで直接指導すべき問題がなかなか解決できない。	B	積極的に部活動や生徒会活動に取り組んでおり、成果もあげている。今後、できるだけ多くの生徒が、部活動や生徒会活動に参画できるような手立てを望みたい。
進路指導	キャリア教育の充実	進路情報提供と進路ガイダンスの実施 健全な職業観・勤労観の育成 卒業予定者の進路決定率の引き上げ	B	キャリア教育の重点的取組４年目で系統的・継続的指導体制が充実。求人数増が内定増に結びつかない。	挨拶ができる、欠席をしない、時間を守るなどの基本を一層徹底し、さまざまな場面でキャリア教育を推進する。	B	さまざまなメニューを用意して、生徒たちの進路希望の実現を図っており、ある程度の成果をあげている。さらに、多様な働き方の選択等、その指導の幅を広げたい。
健康安全指導	危機管理体制の整備	危機管理マニュアルの改訂 防災・不審者対策の訓練・研修の実施 医療相談機関との連携の強化	B	訓練は計画通り6回実施。その反省点を活かし、より実際的な視点から、マニュアルの一部改訂を行った。	緊急情報等を生徒・保護者に伝えるための学校ＨＰの工夫を行う。マニュアルの見直しは継続して行う。	B	ビル内の学校という立地条件に応じ、さまざまな訓練・研修を実施しており、一定の評価を得ている。今後とも、こうした体制を継続させ、危機管理に対処して欲しい。
家庭・地域との連携	保護者や地域への情報発信 生涯学習講座の充実	「霞城学園通信」「霞城通信」の発行 学校評議員制度の活用 魅力ある講座の編成と生徒の参加促進	B	各通信とも定期的に発行した。今後とも内容の一層の充実を図る。生涯学習講座受講者減への対応が課題。	生涯学習講座の内容やＰＲ方法、さらにはその運営の在り方について検討を加えていく。	B	「通信」の定期的な発行を通じ、生徒・保護者に対し情報発信を行っている。今後、紙媒体を通じた情報発信に留まることなく、ＨＰへの掲載やマスコミの活用等、外部への積極的な発信を望みたい。生涯学習講座の良さを広く知ってもらいたい。
特別支援教育	特別支援教育の推進	配慮の必要な生徒への指導体制確立 個別支援チームの結成 国立特別支援教育総合研究所との連携	B	学習支援委員の協力のもと、個別支援を効果的に実施できた。特総研の研究協力校として、専門家との情報交換を通じてさらなる実践力の向上に努めた。	ユニバーサルデザインの授業実践及び個別支援チームによる学習支援を継続する。特総研との情報交換を活かした学習支援のあり方を研究する。	A	生徒一人ひとりの共通理解の基づき、必要に応じた支援が効果的にできている。今後とも継続的に取り組んでほしい。また、外部機関との連携をさらに深めて、幅広い支援を行いたい。